

かの様に光つて動かない。心にいつばいの悲しさを燃やし、眼にいつばいの涙をためて、人生の底知れぬ淋びしさの結晶がジーツと喰ひしばつた沈黙の相貌からポツリ……ポツリ……一滴……三滴と、頬を傳ふては落ちた。

嚴かな夕べ山寺の暮鐘に襲はれて宵闇の薄墨がうつすらと地上をぬり消して行つた。

(一九二一、一〇、初旬)



## 「傳説を語る漁夫」

覺 林 道 人

暴風雨の後、目茶々々に、叩たかれた港街の水ついた大地も、折裂かれた木々も、虐げられた家屋も、秋陽に光を放つて倦怠の色もなく、反つて若々しい静けさをすまもつてゐた。

港の漁家が波うつて、遙かなる彼方の山は、霞に蹲まる。山根の寺が縁鑄に、神祕の光をこめた赤銅の甍が古い過去の歴史を秘めて嚴かなる姿に眠る。

苔生ひた土臺石の周圍から、可也廣い芝生の庭園を押し延べ、芝生から抜け出た老松が全意識を集注して、暴風雨あがりの秋空に、白雲の浮き流れるを黙視してゐる。

屁を驅しつた梁の下に古代的な藝術の巧神が、秋の陽に浮刻られ、海風に朽ちかゝつた素木しきに怪しげな陰影を投げてゐる。本堂の室なかはと、重たい障子を開くれば、薄闇らい須彌壇のほこりから微かな金色を放ち、時古りて磨りはげた柱や、天井から底光りのする暗紅色の漆うるしや、金色の箔はくが、處々に光る。

全く神古りた山寺が、濃緑の芝生に、神祕の影を落とし禪三味の瞑黙をおしまもつてゐる姿だ。寺の右手の荒れ茂つた丘は、墓場である。

墓堀りが四人丘から降りて來た。

「随分骸骨が出たな」

「いやにきびの悪い墓だな穴を掘ても泥水でよ、泥水のブジャ／＼する中に人骨が這入つてゐるだもの——俺達も「時」を経て結局はあゝなるだが………實くそれを考へると嫌になるなア」實くよ、體中をのたうつてる血脈が止ればそれツきり土だの水だのになつて斯ふやつてお前さん達と働いたり話したり考へたりする事もなく「俺」と言ふものが「存在」を消すんだからなあ」だから生きてる中、成るだけ樂しめるだけ樂しむとくだ。向ふ三軒兩隣と、喧嘩ばかりしてゐて、會つても話もしねえでそつぽ向いて通ほる様な窮屈な生活は俺等の社會ぢやしたくねえなあ」實際よ。」

當節の流行語の「愛し合ふ」で悉皆が相互同志仲良く暮らすが一番だよ。人間である以上知らねえものでも、好意を持つのは正當えよ。

それをお前え知つてるものとか、自分や自分の家の爲ばかり良くしてよ、………知らねえ人間は誤魔化してやらうとばかりかゝつてるんだからなあ。俺等も能く解らねえけど、そりやあ喧嘩するときやあし、悲觀する時きあし、呪ふときやあ呪ひ、罵詈つくときや、ついても宜しい、それが正の爲、善の爲、美の爲、人間の爲、佛の爲なら………と坊さまが言はつしやつたが眞實だと思ふよ。全く、人間の「心の根」に「愛」の強いそして寛容い心持を恒に持つての上ならごんなことでもして良いと言はつしやつたが全くさうだんべぢやねえか。」

「そりや、さうだんべい。」

「話しや變るけれど、今度の暴風雨にや、驚れえたちやねえか………十二人も荒波に浚らはれるなんてよ、………俺等が生れて、初めてだえ。」

「實くよ。まだ四人しきや死體が上がらねえたあ、實く慘酷だなあ………俺等あまあ生命拾ひをしてよかつたが、死んだものゝ家族は、むごく可愛想だなあ………皆明日の米に困るその日暮して、實く路頭に迷ふなあ。………神佛や天にや一體心があるだんべいか？」

「俺等にや解らねえ……只そんな慘酷い事が無い様にと一心こめて祈らずに居られねえから佛や神はどんなものか解らねえが祈るだ。」

俺が祈る心持ちや、それだけだ」

泥水だらけの墓穴ごみえて彼等の丸出しの、毛の生えた脚や、毛のない脚はごろ／＼泥まみれてゐる。色あせた紺の絆纏も、したゝか汚れてゐる。泥くちやの鍬や、シャボルや、鎌やざるの類を各々持つてゐる。

四人は穴堀の器具を、芝生に投げて本堂の「ごはい」の階段を上つて外椽に腰をおろした。

墓穴堀は皆漁夫である。赤銅色に、かッやいてゐる顔といひ、手といひ、脚といひ、堅固もたくましい筋肉は、健康そのものゝ様だ。

五十位の「毛むくじやら」の漁夫は言ふ。

「見ねえ！ あの彫刻を——」仰向いて梁を指す。大分古るいなあ——と四十男が相槌を打つ。「雲に乗つて、まるい珠を持つてゐる女があるべえ。」「お、」それから、こつちの家の中で、法を説いてゐる坊さんがあるべえ。」

お、——お經を前に据て、聴衆が座つて聞いてら——。「む、——これがお前、仲々深え因縁があるだて——。」「毛むくぢやら」は、こゝまで話を引張つて來た。腹を叩きへらし、雁頸にやにの一杯ついた、齒型だらけの鈍豆煙管に煙草を、まるめこめて火を黠けた。白い細長い烟は意味ありげに浮刻を、かすめては消えた。

四人は沈黙つてギョロギョロした眼を光らして浮刻を見詰めた。「毛むくじやら」は、暫らく經て鈍豆煙管を、口にくわえたまゝ喋舌つた。

「この山の上に、七面さまが在るべえ」

「お、」「この浮刻の因縁があすこで起つた。」

「おりよりよ！」如何にも意外といふ驚嘆の聲で四十男は答へた。（ありやりやは驚嘆に相槌を兼ねた方

言である。」

「あすこはおめえ知つての通り見晴がよかんべい——遙かに彼方を見渡せば、向ふに富士が山々の中から蒼空に、ツーツと立ち——大磯、小磯、鶴沼から西濱へかけて、曲りくねつた海岸よ、——青松よ、——白波よ、——海の真中に烏帽子岩よ、——前はと見れば、緑の江の島よ、棧橋よ、——海水浴場よ、——昔はそんな事あ、あるめえが——左を見れば小動ぎ岬——七里ヶ濱よ、稻村ヶ崎、鎌倉、逗子三浦よ、大島よ、——まるで、雲が霞の中に夢をむすべるが如くてな見晴しだんべえ——何とも言へねえやな。」「さうよ」「毛むくぢやら」

は、ひこかごの文學者氣取りで、得意然と自然描寫を縷述して、三人を振りむいた。三人はうなづいた。

「そこで、お前——六七百年も昔のことよ——時の鎌倉の役人が、龍ノ口で日蓮様の頸切らふとしてもどうしてもきれねえ。」

「どうしてよ。」

「俺が考げえるに、威に恐れたべい。」

「おりよりよ。」

「それから、佐渡に流されて在島四年の後、師匠孝行の日朗さまが、赦免狀を持つて日蓮さまを迎に行かれた。その歸りによ、日蓮にとつて因縁深かい處だからとあの七面堂で説法を初められた。」

「お、——何日ぐれえよ。」

「何でも、三日計りだべえ。そしたら江の島の方から一時に、雲が涌き出て來たと思ふとあの高え石段を、コツ／＼のぼつて美しい女がよ。」

「ありや、ありや。」

「二人白手拭を覆ぶつて裾をまくり、赤けえ腰巻を出して上つて來たかと思ふと、説法されてる真前にチャンと立派な姿して聞てるだこよ。」

「おりよりよ、」

「でえぶ、面白さうな話だがまあ一杯やるべい。」

茶飲み茶碗の大きいので、地造の酒を波々ついだのは、口びるの爛れた、アルコール中毒の五十男だ。

「何だい—— 一つしか酒盃がねえのかい。」

「お、」 三人は「毛むくぢやら」がグイッと呑み乾すのを見まもつてゐたが、言ひ合せた様に、兩頸のあたりから液態が、一時にドツと口中に走り出ると喉佛をグイッと動かした。

「年の順だ、おめえ、やんな—— さ、酌すべい。」

「皆さんお先さい—— 有難う。もう一杯だ。」アル中は貧乏だもので、後の二人に氣兼ねて曾釋をした。

「おめえ好きだで—— 先さい、やんな——」お、——でもあまりやると棺桶が擔げねえと大變だ。」

「でも四時の出棺だまだ間があらあな。—— やんねえ——」一つの不格格な茶飲茶碗に、波々つがれて順ぐりに四つの口は、喉佛に動令を發して、すゝりこんだ。呑む度に舌鼓が鳴つた。落込むだ腹の中では、酒がだん／＼體中に浸徹つて行つた。

「肴はねえのか」豆腐でも貰つてくりや良かつたな。と毛むくぢやら。」

「お、——俺りあ飲みさいすりやえした。」

「お前、全く好きだなあ、」

「あ、大分廻つて來た——ウ井ッ。」

初から黙つて聞いてた三十男が。

「先刻の話はどうした—— 仲々聞いてみりや深かい因縁があるだな。」

「お、—— 飲むので氣を失つてゐた。——それから二日二晩やつてきたが二晩目にや、さうと、看破られて、別に悪意ではなくた、法華經を聞きたいからやつて來ました。釋迦の説は、龍女も、提婆も、乃至草木も、成佛すると言ふだから………と言ふて消えた。」

「一體その正體は何よッ、」

「正體か、——何でも江の島の辨財天と言ふ話だ。辨財天が法華の法を聞きたくて仕方がねえ處に、佐渡より歸られた日蓮上人の説法がある、これ幸とばかり、人間に化けられたと、………いふんだ。全く傑れえもんだ、御祖師さまあ、それを初から知つてられたと。——尤も鎌倉八幡を叱り飛ばしたと言ふ人だからな——。

「おりよりよ——」

『それで今江の島の崖洞に「日蓮上人寢姿の石」てのがあるべい。』

「お、」

「あれは、後世になつて辨財天がその思ひ出に、日蓮上人のせめて姿なりともと、作られたことよ。」

「おりよりよ。」

三十男は話の續きを提議してから、おし黙つて聞きながら何か胸中で、判断をめぐらしてゐたか。「そんなこと、あんめい——傳説だんべい。」「何傳説ぢやねえだ——ほんとに在つた事だことよ。」「いや——ほんとに、あつたといふ「話」だんべい。」「いや——ほんとに、あつたことだことよ。」「

「解らねえなあ——ほんとに、あつたといふ「傳説」に違げえねえよ。」

「いや傳説といやあ、虚話だ——實際あつた。」

浮刻を見ねえ。これが、ほんとに在つたといふ證據だ。「毛むくじやら」は飽迄、下らず若者にまけるのが残念さに自己の説に意地を張る。彼は現實に居ながら過去に立つて現實に實際だと云ふ。三十男は、現在に立つて過去の傳説だといふ。世の學者先生の中でも、往々こんな立場の相異から喧嘩をして生涯相互に睥み合つて死ぬものがある。

過去の事實は現在に生き、亦現實を生かし得て始めて始めて價值もあり、詮議の必要もある。

實在はやつぱり變移ゆく刻々の現實だ。

「傳説を彫つたのだから、何にもそれが證據にはならねえ。」——岩窟の中の日蓮上人寢姿の石だつて——

あらあ人間が造つただ。」

「ぢや、おめえは傳説としてをきねえな、——おらあ實際あつたと思ふだ。」

「何、(今)から考へて、そんな事があり得ると言ふ程度ならまだしもだが、——おめえは、あまり頑固だよ。そらあ何ば傳説だつて、いくらか其源になる(種)は、あらあね——だがそれを全部本當だと思ふのは、間違えだ。そりや傳説を生んだその頃の人の心が、實際あつた、あ思へねえよ。」——物識り顔に有頂天になつてゐた「毛むくじやら」が物靜かに考へてゐた三十男に鼻先きをへし折られて彼は意地ばつた——この意地が意地惡になつてごつかで仇を討たうと根を持つ。

「おいらあ昔者で、何にも解らねえが——ごふしてもその——」

まあ、宜いやな、二人とも止しねえ——それより一杯飲むべいちやねえか——。「おりよりよ」はさう仲裁した。

彼等三人が傳説だ實際だこやつてゐる間に「山井」と印した一升徳利を先刻から黙つてチビく盗む様  
飲つてゐた「アル中」が大方傾けつくしてゐた。

僅か底に溜つたかすの一二盃を「仲治り」に三人は飲むでゐる。「アル中」はグデグデに酔ふて紅火の様な體  
を本堂の外縁に投げて傾向けに臥てしまつた。

秋の夕陽が、いやまして紅かく墓堀の四人を照射してゐる。(一九二一、一〇、下旬)